提言

国学研究の将来によせて

松本久史

国学を論ずることの現代的な意味とは

二〇二三年度上半期においては、チャットGPTを代表とする生成型AIの活用の是非の議論や対応が、大学をはじめとした研究・教育界で大きな問題となっている。対策に奔走させられた研究者も少なくはないであろう。さらに、将来のテクノロジー人材の確保という大義名分で、政府は全国の大学に理系学部・学科の増設を求め、補助金による政策誘導をしているが、人文・社会系学部の削減が同時に進行することは明白である。我々が思想する営為、その源泉としての知の状況や基盤が大きく揺らいでいる中で、近世・近代の学問知としての国学を問うことに一体何の意義があるのだろうか。

二〇二二年三月に筆者は、複数の研究者と共同で国学の通史を叙述した概説書『歴史で読む国学』（國學院大學日本文化研究所編、ぺりかん社）を上梓した。この縁にことよせつつ、今、国学を問い直すことの意義についての私見と提言を以下に示したいと思う。

まずは、筆者の個人的な思い出を語ることから始めたいと思う。まだ國學院大學の院生であった一九九七年頃に遡る。院生を中心とした若手研究者の自主的な研究会で、平田鋏胤が奥州相馬の篤胤門人の神職、高玉安兄へ宛てた約百五十通におよぶ書簡に取り組むこととなった。ペリー来航後の緊迫した状況、安政の大獄や桜田門外の変などの政治状況がリアルに語られるが、そのほかにも

紀州の山中に棲む神仙の予言の是非に、門人たちが夢中になっていることや、求めに応じて安兄の妻女のために江戸の紅、かんざしまでを銕胤が調達したことまでが記されていた。安兄という、全く無名の人物との間にここまで濃密な情報やモノのやりとりがあるという事実の前に、駆け出しの国学研究を志す院生の、四大人の全集があればこれで足りる、という認識の甘さが打ち砕かれたのであった。一人の門人だけでもこれほどであれば、気吹舎門全体では一体どんな世界が広がっているのかと、驚きとともに途方に暮れた。

筆者が博士課程のテーマとした荷田春満は、二十世紀末においては、「ふみわけよ 大和にはあらぬ 唐鳥の 跡を見るのみ 人の道かは」の歌と、『創学校啓』のみで国学の始祖として称揚される一方で、その学問業績が一向に不明であり、三宅清による詳細な研究によっていわば、看板だおれで学者として特記すべき業績もないことが暴露された、という認識が定着していた。所詮は思想家としては二流で、「四大人」は、自己をその列に入れたい篤胤や平田派の捏造に過ぎない、という流れであったと思う。そこには同時に、狂信家で非合理主義の篤胤という、第二次大戦直後の和辻哲郎や鈴木大拙などの与えた評価が依然圧倒的に大きな影響を持ち続けたということも意味していた。しかし、現前にある銕胤の書簡の解読を進めるほど、そのような通念は妥当なのであろうかという疑念は日々大きくなっていった。春満を検討する前に、篤胤という存在とその学問にも立ち向かう必要が生じたのであった。有体に言えば貼り付けられたレッテルとの格闘の開始でもあった。それは同時に二十世紀末までの国学受容史に対峙していくことを意味していた。それにもかかわらず、自分自身には手持ちの新たなカードすらなく、既存の公開、刊行された史資料と研究成果をいかに再検討し、新たな解釈を導かねばならない（むしろ、ひねりだす、と言ったほうが妥当であったかもしれない）、という一種の閉塞状況であった。

しかし、二十一世紀劈頭に開始された新たな史料調査と研究が、その状況を一変させていった。銕胤書簡の勉強会と翻刻作業を細々と続けている中、二〇〇一年に国立歴史民俗博物館の宮地正人を中心とした研究グループが、平田家史料の調査を開始したことを仄聞した。これは大変なことになるぞ、という予感を抱かせるものだった。さらに、偶然とはいえ、ほぼ同時期に、國學院大學では二〇〇二年の創立百二十周年記念事業として、新たな荷田春満の全集編纂の事業が立ち上がった。当時、春満を専門に研究している者はおらず、わずか一本の春満

の論文を書いただけの大学院を出たての筆者が、編集作業に加わることとなった。発足当初は数少ない史料をかき集めることに奔走したが、編集委員会の責任者であった青木周平、根岸茂夫の尽力により、東丸神社の全面的な協力を得ることができ、三宅清以来、研究者が披見することのできなかった春満の生家、東羽倉家文書の調査と研究が開始されたのであった。これら、篤胤と春満の新たな一次史料発掘の結果として、調査に関わった当時若手であった研究者たちがその後に単著を出版し、学位を取得するなど、新たな研究が結実しつつある。

奇しくも、荷田春満と平田篤胤という、四大人の「始まりと終わり」の史料調査・研究にともに関与した者が、それを通じて見えてきたものとは何であったのかを以下述べてみたいと思う。

国学研究のゼロベース

筆者が院生であった当時から二十年以上経過した今日、国学の認識についての社会レベルの通念は、何が変わったのだろうか。教育の現場からの現状認識では、大きな変化は見られないことを痛感している。例えば、筆者が担当している「国学概論」の講義の中で、代表的な国学者を一人挙げよ、という問いを学生に投げかけると、少なからず「吉田松陰」という答えが返ってくる。また、多少なりとも日本史に関心のある学生は菅原道真や北畠親房を挙げるという現状である。ひとり国学だけではなく、これは思想史研究が抱えている問題点でもあろうが、いわゆる川上である研究の最先端の現場では常に新しい説が創出され、定説に対する異議申し立てが不断に行われているにもかかわらず、川下である一般社会における通念は、旧態依然であるという状況は、研究者の成果の社会還元をいかに有効に行えるのかという大きな課題を投げかけている。

尊皇ならば国学、日本を対象とすれば古代や中世の人物でも国学者であるという、第二次世界大戦前後に形成された国学理解は訂正されずに今にいたっている。しかし、一方ではそれを否定して、それ以前の認識に戻ることの生産性があるようにも全く思えない。戦前期の国学熱に対する反作用としての戦後の国学批判であったが、その歴史的な役割は既に終えている筈である。ところが、大学の講義において、たとえば、近世の国学がいかに幕府の庇護のもとで生成発展してきたか、逆に京都の朝廷は新興学問である国学にいかに冷淡であったのかという説明をしても、学生は通説とのギャップに混乱してしま

い、十分な理解が得られない状況が続いてきた。

通史で国学を考えること

現在までの国学研究を見通して、中澤伸弘『やさしく読む国学』（戎光祥出版、二〇〇六年）、田中康二『国学史再考――のぞきからくり本居宣長』（新典社、二〇一二年）など、近世・近代を包括した全体的な国学を論じる概説書もあらわれている。これらは単独の著者の知見に基づいて、一貫性を持った叙述がなされており、それぞれ示唆に富む。一方、『歴史で読む国学』は共同執筆の形態を取り、各章を担当する研究者の専門は各々異なっている。複数の視点から国学を論じるというメリットはある反面、偏りや見落としも少なくはない。それは承知の上で、一冊の本としての統一性を維持するために厳守したのは時間軸であり、時系列順に国学を叙述することを徹底させることであった。

なぜ、通史に徹したのか、それは現状の国学理解を決定づけているふたつの画期を、それらを特権化することなく歴史に差し戻して、同時代的文脈で再考するための必須の第一階梯であると考えたためでもあった。従来の国学理解を導き、一方では妨げてきた、国学に対する毀誉褒貶が集約された、幕末維新期と第二次世界大戦前後の二つの時代。それぞれに国学は相反する評価に揺れ動いている。幕末維新期においては、倒幕を成し遂げ、「神武創業」の理念に基づく王政復古・祭政一致の天皇親政を実現した原動力としての評価とともに、西欧近代の政治システムや学術に抵抗した頑迷固陋な旧習の代表としても捉えられる。維新後の国学の栄光と挫折は、島崎藤村の『夜明け前』に結実し、抜きがたいイメージを形成していった。第二次世界大戦前後においては、戦前期に「国学熱」ともいうべき国学への注目があり、「国体」を論じる上で不可欠な要素として国学者の言説がもてはやされ、国学者を称揚する研究や刊行物が盛んに出されていった。戦後期は一転して、「国学批判」が学界・言論界においては主流になり、まずは批判的スタンスをとってから国学を論じることが一種の作法となっていった。

これらの経緯が、現在の抜き難い国学への社会的通念を歴史的に形成したことは間違いない。逆にいえば、この二つの山を乗り越えない限り、現状認識を変革することは不可能である。乗り越えるとは、単純な批判や忘却を意味しない。その前後の歴史的文脈から、なぜこのように国学がイメージされたのかを明らかにすることであ

り、通史的俯瞰こそが必要となる所以でもある。

研究の視座と方法

通史が縦軸であるとすると、同時代的・全体的見取図を描くのが横軸ということになる。近代学術の専門分化以前の学問である近世国学全体を把握する場合、総合的な人文学と規定することに、研究者自身もあまり疑いを持っていないように思われる。しかし、あくまでもそれは近代の学問区分からの視点であることに常に反省的でありたい。国学は総合的な「人文学」ではないかもしれない、という懐疑からはじめることである。人文学と定義することにより、切り捨てられ、忘却された領域は数多く残されている。端的に宣長の『古事記伝』や篤胤『霊能真柱』における古典・古伝承認識を考えても、彼らの中心的な課題と当時最新の西欧天文学の知識に基づく世界認識とは不可分であるように、文系・理系の垣根は存在していなかったことを省みるべきである。

このように、縦軸としての時代、横軸としての研究領域を踏まえた上で、国学の三つの次元①学術としての国学の内容、②国学の社会的受容、③国学研究史、を明確に区分した上で考察すること、それらを混同してはならないことの認識を徹底できるかにかかっている。これらを区分しつつ、いままでに明らかになっていること、不明なことの弁別をつけていく、つぎに三つの次元の関係性を詳細に分析するという方法を確立していく必要性がある。

まずは、学術としての国学の内容は、ここでも時間軸として近世国学と近代国学の区分をすることが第一の留意点である。そもそも、国学自体の対象を近世に限定する見解もあるが、筆者はそれを採らない。近代の国学は、依然として「国家の学」（『創学校啓』）として存在し続けたと考えている。折口信夫の謦咳に接した國學院大學の歴史学者の藤井貞文により、近代国学という問題意識が提起され、近世国学が近代学問体系の中で分化・純化することにより、近世国学が「転生」（『明治国学発生史の研究』吉川弘文館、一九七七年／『江戸国学転生史の研究』吉川弘文館、一九八七年）したとされた。その認識は阪本是丸によって継承・展開され、明治前期の国学者の活動に検討を加え、近代学術の中で国学は決して滅びていなかったことを証明しようとした（『明治維新と国学者』大明堂、一九九三年）。その情熱はさらに積極的に「近代国学」を定義し、分析・検討した藤田大誠の研究に至っている（『近代国学の研究』弘文堂、二〇〇七年）。これらの研究は、「国

学」の名を冠する國學院大學の学問アイデンティティの追究でもあったが、その成果によって、大学を中心とした高等教育機関において展開した学術としての側面を中心に、国学の影響が文学や歴史学などの近代人文学のみならず、法制度・皇室制度の整備、神社行政などの近代国家体制に影響を与えたことが明らかになっている。

近世国学をどのような展開を見せたかを説明する際にも、「四大人」や「三哲」観によるものでは十分に理解できない。主流とみなす学統の単線的な展開を重視した理解が一般的であるが、近世の中に複線的な学統の分岐と相互交錯の姿を見なければならない。例えば、荷田春満に始まる荷田派の国学の展開についてみれば、単線的四大人観では、春満の没後は直ちに真淵の時代であり、荷田派の存在はほとんどないに等しい。しかし盛田帝子が明らかにしたように（『近世雅文壇の研究――光格天皇と賀茂季鷹を中心に』汲古書院、二〇一三年）、実際には春満の学は江戸において在満から御風・蒼生子へと受け継がれ、宣長が『古事記伝』を執筆していた天明期まで、荷田派は一定の地位を占め続けていたのである。篤胤についても同様であり、気吹舎が鈴門系の門人数を凌駕するのは維新後であり、宣長没後直ちに平田派の時代が来たわけではない。さらに明治以降になると、鈴門の領袖であるはずの本居豊穎が、平田派的な幽冥観の影響が色濃い大社教の副管長に就任しているのである。時系列的に見ればこれらの事実は明白であるはずだが、列伝的国学史の叙述ではそれが見えなくなってしまっている。

近世国学そのものの内容の多様性の吟味について、筆者の事例を示すと、国学研究の観点から神道研究の再検討を進めていく過程で、「復古神道」の根本的な見直しが迫られている。国学の持つ多様性から逆照射すると、儒家神道のアンチテーゼとして直ちに復古神道が登場したわけではなく、復古神道の枠組み概念自体が再検討を要するものとなってきた。復古神道が先見的に儒教を排除するものだとみなすと、春満の活動は奇妙で整合性がとれていないように見え、むしろ儒学者であって国学者ではない、ともいいたくもなるが、そもそも国学が成立した春満の時点では、必ずしも儒教を排斥していない。かつ、古道論が展開した幕末期においても同様であり、平田銕胤はペリー来航時には水戸藩への強いシンパシーと期待を抱いていたのである。

第二に、国学の社会的受容研究については、政治思想における国学の影響関係を取り上げる場合、関心は幕末維新期に集中しているが、歴史学における朝幕関係や幕藩政治研究の進展と歩調を合わせるならば、もっと長い

スパンでの考察が必要になるであろう。天皇・朝廷が単なる金冠部としてのお飾りではなかったことも明らかにされつつあり、天皇・朝廷を常に意識し対象としてきた国学の影響はイデオロギー面のみならず、政治過程の検討の中でもっと論じられてよい。たとえば、近世中期の「文治政治」の進展に伴って幕府の朝廷に対する文化的コンプレックスが、春満、在満、真淵へと継承されていく、まさに国学を生み出した「揺籃」であった「和学御用」を必要とする背景になっていると考えられる。また、幕末の政治状況を考える場合においても、井伊直弼と松平春嶽という南紀派・一橋派を領導した大名がともに国学を深く学んでいることなどを鑑みると、単に尊皇攘夷派のみならず、広範な層に国学が受容されていたことも考慮に入れ、幕末の政治過程との関係が語り直されていくべきであろう。

また近代の政治過程との関連でも、再考を促すべき事実がある。筆者の関心を一つだけ例を挙げると、自由民権運動と国学との関連性である。宮地正人は、足尾鉱毒事件で知られる田中正造が青年期に気吹舎に入門していたことに注意を促しているが、「憲政の神様」の尾崎行雄も同様である。また、従来福島県の民権家として知られている奥州相馬の神職の出身である苅宿仲衛は、前述の高玉安兄に皇学を学び、門人帳に記載はないものの気吹舎にも入門しているようである（松本美笙『志士 苅宿仲衛の生涯――自由民権家の軌跡』阿武隈史談会、二〇〇一年）。実際に平田派の中には少なからぬ数の民権家が存在していると考えられる。従来は国学者と民権運動との関わりといえば、丸山作楽の立憲帝政党がすぐに想起されるが、国学者イコール国権派という思い込みも訂正されなければならないだろう。

学術としての近代国学の枠組みや、その内容理解は、阪本や藤田によって大きく開拓されたが、近代国学の社会的受容についての検討は今後の大きな課題として残されている。アカデミズムの中での言説形成が、いかに社会に流通し、影響していく過程についていまだ不明のところが多い。そこでは、近世国学との間の連続性にも着目することが有効な手段となりうる。中央の官学界だけではなく、地域や民衆へ目を向け、国学がどこに息づいていたか、すなわち、幕末期以来の「草莽の国学者」のゆくえを連続的に近代社会の中に探ることである。これは民間の中に民俗を探った柳田・折口の「新国学」の提唱とも相通ずるものがある。新国学の方法論としての民俗学も当時は在野の学の性格が濃かった。また、文芸に目を転じてみれば、近代国学者の多くは学問と並行して

歌文の実作に励んでおり、文芸結社を結成しつつ近世以来の繋がりを持つ地域の歌文サークルとの関係を保ち続けていた。四千人を超え、その多くが明治元年以降に入門した気吹舎門人が、そうも簡単に雲散霧消してしまったと考えることは、それこそ不自然ではなかろうか。近代国学が近世と截然たる隔たりをもったものなのだろうかという疑問は絶えない。古典文化を享受するという広範な人々の欲求に近世、近代を通じて国学は寄与している。現代まで続く短歌・俳句サークルの全国的・社会的な受容や文化リテラシーの面からも考察が必要であろうし、文芸への影響は戦前期の日本浪曼派の活動などとも深く関わっていると考えられる。

第三に、国学の研究史であるが、早くも近世後期においては、国学の学統をめぐる議論が始まっている。国学の主流は古道を重視する「四大人」か、歌道の「三哲」のいずれかとする問題である。すでに述べている通り、国学全体を理解するためには不適当であるが、研究史としての意義を深めていくべき問題であろう。明治以降は国学をどう理解するかは、近代国学の成立と不可分の関係を持ち、小中村清矩の「国学和歌改良」の提起から、明治末期の田中義能の「神道哲学」や村岡典嗣の日本思想史学の確立との関係から、戦後における丸山真男の政治思想史に至る流れ、また折口信夫以降の國學院における国学の回顧や「新国学」の提唱など、これらもまた、同時代的な要請を十分に考慮した上で分析していく必要があるだろう。これらを踏まえた上で、国学の内容、社会的受容の実態解明を進めていくことである。

国学研究のプラットフォーム
――「である国学」から、「でもある国学」へ

『歴史で読む国学』では、やや網羅的ではあるが、「国学へのあたらしいまなざし」と題して、以下の通り、今後の研究課題十四項目を挙げている

①創学校啓と国学／②歌文派と古道派／③書物と国学者／④国学者の蔵書／⑤モノと国学／⑥法と国学者／⑦言葉と国学者／⑧歴史と国学者／⑨教会・講社というカテゴリー／⑩神道という枠組み／⑪国学の宗教化／⑫祭神論争と国学／⑬国学とジェンダー研究／⑭国学研究の国際化

これらを見渡せば、現状の各研究が精緻化している状況において、自己の専門分野においての発見により、国学は何々であるという言明をしていくことよりも、これもまた国学であったか、という再発見をしていくことが可能になってくるのではないであろうか。その中で今後

の展望を若干述べてみたい。

③④は、メディア論とのかかわりでもあり、若尾政希による「書物の文化史」研究以降の展開と関連しつつ、知識受容史研究の進展に対応し、近世の出版メディアの展開にも重点的に注意を施している。国学が無名の人々の知的欲求にどう答えたのか、気吹舎の出版活動が典型的であり、その発信意図については吉田麻子によって詳述されているが（『知の共鳴――平田篤胤をめぐる書物の社会史』ぺりかん社、二〇一二年）、それのみではない。全国の広範な読者とその読書行為の意味するものの分析が深化していくことにより、時代、地域ごとの詳細な受容形態が明らかになることが期待される。

⑬⑭の女性への注目と国際化に関しては、近世・近代の学問、政治・社会に焦点を当てた場合にも共通しているが、国学においても著述や記録された資料の作成者も男性であり、男性中心の叙述に偏っていた。戦前期においては「勤皇」や「貞女」といった価値観の中ではあるものの、若干の女性国学者への注目はあったが、多くは男性視点の女性観が窺える程度であった。現在、その状況が大きくシフトしつつある。勤皇の観点より戦前から評価の高かった女性国学者松尾多勢子については、アン・ウォルソールによる詳細な評伝があり（『たをやめと明治維新――松尾多勢子の反伝記的生涯』ぺりかん社、二〇〇五年）、貞女として顕彰されていた只野真葛については、ベティーナ・グラムリヒ＝オカによる論考がある（『只野真葛論――男のように考える女』岩田書院、二〇一三年）。いずれも女性史を見通した新しい視点が取り入れられているだけではなく、史資料を丹念に読み解いた労作である。両者は女性研究者であると同時に外国人でもあり、日本国内の研究者は何をしているのか、かえって「勤皇」「貞女」といった戦前期の評価に囚われているのは一体誰なのか、というもどかしさも否めなかった。

国際的な研究についても、頂点的国学者のナショナリズムに関わるイデオロギー言説分析の視点が中心であった二十世紀の動向からの変化が見られつつある。ギデオン・フジワラによる津軽の平田派門人研究など、地域の一次史料を発掘し、丹念に読み込んでその活動を明らかにしようとする研究もあらわれはじめている。なお、国学の国際的研究については、筆者が中心に企画・立案して、二〇二〇年二月に國學院大學日本文化研究所で国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」を開催し、議論を交わしている。発題の五人の外国人研究者のうち三名は女性で構成されており、今後の研究の展開を展望し

たものであった。詳細は同フォーラムの開催報告書（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所『二〇一九年度国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」報告書』二〇二一年二月）を参照されたい。

さらに、現在の国際的な状況を見渡せば、どうやら「国学」といえば中国という時代が到来しているようである。用語自体は一九二〇年代に日本の「国学」を逆輸入したものに由来すると考えられるが、一九八〇年代の開放政策以降に「国学熱」が起こり、二〇〇五年には中国人民大学に「国学院」が設置されるまでにいたっている。中国の「国学」は、記紀万葉の日本の古典ではなく、四書五経などの中国古典を学び、中国文化固有の精神性を明らかにすることがその内容であるようだ。国家的なバックアップを受けて「国学」研究が進められているようであるが、近い将来、国学の本家は中国であるという主張すら普通になってしまうかもしれないほどの勢いがある。欧米以外の視点による国学研究の展開については、今後いっそう注視していく必要があるだろう。

希望を人文学に、若き研究者たちに

社会の大勢としては国学全体に関するイメージは変わっていないが、新たな変化の萌しもみられつつある。近年の平田篤胤に関するイメージの変貌ぶりは一つのモデルケースとなりうるであろう。ＳＮＳがきっかけとなって岩波文庫版の『仙境異聞・勝五郎再生記聞』（子安宣邦校注、二〇〇〇年）が突如売れ始め、版を重ねた「椿事」が話題となったが、篤胤は草の根的、サブカルチャー的な人気を得ていることにも注目したい。ネット環境における知の平準化、学術情報へのアクセスの拡大のもたらすものとして、ハイカルチャーとサブカルチャーの攪拌状況の到来は、まさに近世後期から幕末維新期にかけての「草莽の国学」的展開でもあると考えられないだろうか。

研究レベルにおいても、発端としての宮地正人による調査・研究以降、新しい潮流を感じさせるものがあらわれ始めている。近著、山下久夫・斎藤英喜編『平田篤胤 狂信から共振へ』（法藏館、二〇二三年）は、時間軸は中世から近世へ、近現代から近世へと、また各論者の横軸としての専攻分野は多岐にわたっている意欲的な構成とな

っている。このような動きは、国学研究全体が時間軸、専門分野をクロスオーバーしていく方向性を感じさせている。

冒頭で生成型ＡＩの展開について述べたが、ネガティブ面のみをあげつらうのはフェアではあるまい。インターネット環境が知識をめぐる風景を一変させている中で、新たな胎動が起こっているはずである、もはや、テクノロジーと人文学は不可分の段階に突入している、テクノロジーの活用により可能となる領域は大きく広がっており、研究環境は劇的に変化しつつある。国立国会図書館の「次世代デジタルライブラリー」や国文学研究資料館「国書データベース」をはじめとする諸機関のデジタルライブラリーやデータベースの充実、機関リポジトリによる論文のデジタルデータ公開などによって、今まで研究者一人一人が長い年月をかけ、史資料を収集し先行研究を検討してきたプロセスが、極めて短時間で可能になってきている。またデジタルツールとして、くずし字解読アプリが開発され、日々その精度は向上しており、特別な訓練を受けずとも、未翻刻の一次史料にアクセスできる可能性も高まってきている。この状況は、従来は経験年数がアドバンテージであった人文系の研究分野においても、若手研究者にとっては大きなチャンスとなり得る。今後の研究のクオリティは、集められたデータをいかにゼロベースで客観的に分析・理解するかにかかっているともいえよう。

そこであらためて、何々「である」国学、ではなく、「でもある」国学への意識転換を提言したい。「文理融合」のスローガンのみが先行し、十分な検討や同意もなしに、拙速とも思える政策が展開される中、現場の研究者たちは対応に奔走し、疲弊している。しかし、「文理融合」以前の「文理未分」であった国学の持つ総合性への再検討は決して無意味なものではないであろう。国学をこれこれである、と狭く限定するより、これでもあり、あれでもあったということを再発見する営みに、将来への一つの可能性を見出していきたい。さらには、思想史もその内に含まれる、日本の人文学の再生と逆襲を期したい。

〈國學院大學教授〉